

であり、しかもどこまで行ってもとにかくあまりに結論が見えないので、実際問題として、台所であろうとレストランであろうと、やっぱり個々人の分別にかかっていて、(ダジャレ抜きに)自分のハラに従うしかない。
20 それもかなり劣っているのは明白で、というのもここにおける

倫理的比較は、人間ひとりの命の価値 vs. 動物一匹の命の価値じゃなくって、動物一匹の命の価値 vs. ある特定のタンパク源に対する人間の好みなので。もっともダイハードな肉食愛好者でさえ動物の肉を消費することなしに良い人生と食生活を送ることは可能であると認めるだろう。

解説

すばる
海外作家シリーズ
40

エッセイストとしての デイヴィッド・フォスター・ウォレス

吉田恭子

大作 *Infinite Jest* を二十四歳の若さで発表し、トマス・ピ
ンチョンの後継者とも目された小説家デイヴィッド・フォスタ
ー・ウォレスは、エッセーの名手でもあった。その素材はテ

ニスや書評を筆頭に、政治キャンペーンやラップ音楽、数学
の集合理論、英文法、そしてクルーズ船ツアーに農業博覧会
にロブスター料理といった極めてアメリカ的でニッチなトピ

ックまで、バラエティに富む題材を扱いながらもそこには常にウォレスらしさを見出すことができる。ことばだけを通し、て事象を読者に伝えようとするくどいほどのこだわり、脚注を単なる補足としてだけでなく、直線的ナラティヴを解体し脱線によってトーンやペースを自在に制御しつつ作品に劇的な効果をもたらす仕掛けとして用いる戦術、術学的な学術調とやたらと頭の回転が速い若者が気ままに喋っているかのようなのびのびとしたことば遣いを絶妙に掛け合わせた文体、時として戯画的なほどのコミックセンスに皮肉とユーモア、どんな小さな残酷さや優しさも見落とさない感受性、感傷的でありながらおセンチに陥らないバランスと、ウォレスらしさが凝縮されている。ファンや研究者の間では、従来のポストモダニズムと一線を画して、「単義主義」とも呼ばれる倫理的メッセージを前面に打ち出してくる姿勢や人間性への誠実な希求を評価する声が強い。そのような魅力にことさらに気づかせてくれるのも彼のジャーナリズム諸作品である。またこの人の長編小説はさっと読める類のものではないので、多くの一般読者にとってはエッセイストとしてのウォレスの記憶がこれからも長く継承されると思うし、実際、彼の小説よりもエッセーを高く評価する声さえある。ウォレス文学の紹介あるいはその結晶として日本の読者にも彼のエッセーを読んでもいただきたい所以である。

本作は雑誌『グルメ』二〇〇四年八月号に発表され、その

後『ベスト・アメリカン・エッセー 2005』に再掲載されるとともに、二〇〇五年に同じタイトルのエッセー集に完全版が収録された、名実ともにウォレスの代表的ノンフィクションである。ウォレスをメイン州ロブスター祭りに派遣した当時の編集長ルース・ライシルは彼の作風にあまり詳しくなかったようで、グルメ旅行記を期待していたところ、送られてきたのは米国レジャー産業の意義を根本から問い直す姿勢が貫かれたエッセーであり、美食のためにいきものに課される痛みについての詳細な考察、そして『グルメ』読者ひとりひとりへの問いかけであった。上品な誌面を維持したい編集側と確信的な著者の間で厳しいやりとりがあったことは想像に難くない。雑誌掲載にあたり個別の表現を柔らかなものにしたたり、読者への問いかけを間接的な口調に改めたりの変更が加えられたが、それでも、オフビートなユーモアで描く祭りの情景にはじまって、アメリカにおけるロブスターの歴史を紐解き、一見『グルメ』読者の好奇心に応えるかのようにさまざまなた料理や調理法を紹介し (*Unfinitest* の読者であれば電子レンジ調理法にドキッとするはず) ……そうしてわたしたちは気がついてみればまるで「徐々茹で」の釜にはまってしまったかのように、動物の肉を口にする際には誰だっけと避けたい問題にどっぷり首まで浸かってしまっている。案の定、『グルメ』誌史上最多の苦情の投書が殺到し、十月号の投書欄には十七通もの賛否両論が掲載されている。実はウ

ウォレス本人は、J・M・クッツェーやジョン・サフラン・フォアと違って、生涯、菜食へ転じることはなかった。本作の取材中もロブスターをしっかりと食べていたと当時の婚約者カレン・グリーンが証言しているし、その主眼は菜食主義の正当性よりもむしろ想像し難い他者の痛みにあることは明らかである。ウォレスは長年大型犬と暮らしており、動物が痛みに対して無防備であることが常に彼の心につきまといていたようだ。

今回の翻訳は多少短めの雑誌掲載版をもとにしているが、ページの都合上、注を数カ所削除・省略せざるをえなかったことをお断りしておく。注の番号が飛んでいるのは削除のためであり、省略箇所は「……」と記してある。

デイヴィド・フォスター・ウォレスは、一九六二年、ニューヨーク州イタカに生まれ、イリノイ州シャンペーンに育った。アマースト大学で哲学と英文学を専攻し相論理学論文と長編小説を卒業論文として提出、アリゾナ大学大学院で創作を学んだ。一九八七年に第一長編『ヴィトゲンシュタインの箒』（講談社・宮崎尊訳・一九九九）、一九九六年に千ペーシを超える百科全書的小説 *Infinite Jest* を発表、世代を代表する小説家として後進の作家やアーティストらに多大な影響を与えた。実験的な短編小説も数多く、短編集『奇妙な髪の少女』（一九八九、白水社・白石朗訳・一九九四）、*Brief Interviews with Hideous Men*（一九九九）、*Oblivion: Stories*

(二〇〇四) がある。

またエッセイストとしては、月刊誌『ハーバーズ』を中心に、『ローリングストーン』『エスクァイア』『アトランティック』『ニューヨーク・タイムズ』などに多数寄稿し、代表作は *A Supposedly Fun Thing I'll Never Do Again*（一九九七）『*Consider the Lobster*（二〇〇五）』*Both Flesh and Not*（二〇一二）にまとめられている。日本ではマーク・コステロとの共著で八〇年代後半の黒人文化を考察した『ラップという現象』（一九九〇、白水社・岩本正恵訳・佐藤良明監修・一九九八）と、伝説的なケネオン大学の二〇〇五年卒業式スピーチ『これは水です』（二〇〇九、田畑書店・阿部重夫訳・二〇一八）が翻訳紹介されている。

少年時代から断続的に鬱病と闘ってきたウォレスは、二〇〇八年九月、第三長編 *The Pale King* 執筆中に自殺。四十六歳だった。同世代の作家やファン、研究者は今もそのショックの余波を感じている。彼のレガシーの本格的評価はまだまだ始まったばかりだ。